

当事者の体験から学ぶ、病期におけるリハビリテーションの役割

医療法人社団永生会 永生クリニック リハビリテーション科

○ 作業療法士 ^{ヒラノ} 平野 ^{アサ} 彩

【はじめに】

19年前に交通事故で頸椎を損傷した当事者から、現在までの体験とそれに伴う心理的な変化について聞く機会を得た。受傷から絶望期を経て、「生きる価値を見いだす作業をしている」と語るまでに至った心理的な変化とリハビリテーション（以下リハ）の関わりを時系列で整理し、病期におけるリハの役割について考える。なお、著者は当事者の外来作業療法（以下OT）を引き継ぎ、担当して2年が経過している。

【当事者紹介】

67歳男性。19年前に交通事故で頸椎を不全損傷。C4-5レベルの脊髄損傷により車椅子生活となる。ADLはほぼ自立しているが、身の回りの準備や仕上げに簡単な介助を必要とする。事故後は精神的な落ち込みから自宅に閉じこもる生活を送っていたが、現在はカメラやパソコンを操作し、障害者の外出支援のサイト「車椅子お出かけ応援サイト <http://wheelchair-outing.a.la9.jp/>」を企画運営している。当クリニックには受症後7年目から12年間通院している。

【経過】

第1期：受傷から退院まで（治療期）—約1年半

医学的治療と合わせ、退院に向けたリハに取り組む。本人の“機能回復への期待”に応えることや退院後の生活に向けた具体的な支援が行われた。

第2期：退院後、精神的な落ち込みの強い時期（絶望期）—約5年間

入院中にできていたことが、自宅では“できない”ことに直面する。絶望に陥り、周囲の人の善意の言動にも拒否する状態であったと語る。外出せずに自宅に閉じこもる生活が続いていた。

第3期：障害を受容し、自主的な作業に取り組み始めた時期（再生期）—約10年間

本人は長期間変わらずにいることに耐えられなくなったと語る。知人に温泉旅行に誘われたことをきっかけに外出に一步踏み出した。自分より重度の障害を持つ人が、当たり前のように釜山へ旅行に行くことを目の当たりにし、少しずつ前向きになった。自主的にカメラや外出、旅行に取り組み始め、外来OTでは本人の身体状況に合わせたカメラの操作方法の提案や外出方法の相談に応じた。

第4期：自己表現と社会参加に取り組む時期（再生期～現在）—約3年間

趣味であったカメラや外出、旅行が、障害を持った自身の体験と合致し、「車椅子お出かけ応援サイト」の立ち上げに繋がった。現在では本人が主体となり、運営のための情報収集や取材、宣伝、地域フォーラムでの発表に取り組んでいる。外来OTでは情報提供や取材協力、パソコン操作の相談に応じている。ご本人はこの取り組みについて、「私自身のQOL向上と生きる価値を見出す作業の一環でもある」と述べている。

【考察・まとめ】

当事者の体験から、主体性の向上に応じてリハの役割が変わってきたことがわかった。絶望期から再生期に至るためには、“時間”と“きっかけ”が必要であったと考えられ、この時期のリハの役割は“待つ”ことや一步踏み出せる“きっかけ作り”であった。絶望期が5年と長く、きっかけとなった釜山旅行はリハが提案したものではなかった。しかし、本人が主体的に一步踏み出そうとする活動を、満足感・達成感が得られるように身体面・精神面を客観的に評価しながら支援することがリハの役割として大きな部分を占めると感じている。